

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## The woman of negishi : Kuki Shuzo and Kafu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小浜, 善信, Obama, Yoshinobu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1400">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1400</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 根 岸 の 女 —九鬼周造と荷風—

小 浜 善 信

### はじめに

九鬼周造(一八八八[明治二一]—一九四一[昭和十六])は永井荷風(一八七九年[明治十二]—一九五九[昭和三四])より一〇歳ほど若い。一見すると、九鬼と荷風にはある種の共通点があるようにおもわれる。兩人ともにいわゆる高級官僚を父にもち、経済的には何の不自由もなく、自分の人生をいわば好きなように生きることができた。九鬼は歌沢の師匠に就いたり、三味線やバイオリンを嗜んだりしていたようであり、荷風も落語や三味線などの芸事に熱中した。当時としては異例であったが、九鬼は足掛け八年間ドイツ・フランスを中心とした欧州で、荷風は約四年をアメリカで、続いて一〇ヶ月をフランスで過ごした。九鬼は最初の二年間ほどは哲学研究によりは、少年時代からなりたっていた植物学者に憧れてアルプスで植物採集やその標本作りに精出したり、詩作に耽ったりし、荷風は学業嫌いを心配した父の斡旋でそのために渡ったはずのアメリカでの銀行業務にではなく、また英語の勉強にでもなく、恋人のように憧れていたフランスに行きたいと希い、フランス語の勉強に励んだ。ふたりとも日本人離れた長身・風貌であり、異国で恋もした。さらに、帰国後、九鬼は京都・南禅寺近くの住まいを拠点に祇園に遊び、荷風は麻布の自宅偏奇館ベンキかんを拠点にして銀座、浅草、新橋あたりを日をあけずに徘徊した。そしてなよ

1 一九二五(大正十四)年、パリから匿名S.K.で『明星』に発表した「巴里小曲」の中の「ノクターン」と題された短歌の中に次のような一首がある。「ふるさとのしんむらさきの節恋しかの歌沢の師匠も恋し」。また同じくパリから『明星』に発表した「巴里心景」の中に次のような一首もある。「うす墨のかの節廻し如何なりけん東より来て年経たるかな」。高橋眞司『九鬼隆一の研究：隆一・波津子・周造』未来社、三〇二頁、二〇〇八年。

2 九鬼は一九二一・二九年の間、荷風は一九〇三・〇八年の間。

りふたりとも、日露戦争(一九〇四[明治三七]-〇五)後の、自然や文化を荒廢の淵へ追いやって顧みない当時の日本の状況に批判的であり、江戸の化政期に花開いた文化に見られる美を愛した。そのような共通点である。

哲学をエロスと呼びしアカデミア昔を今になすよしもがな  
ヘタイラ  
 藝者衆を弟子に数へしエピクロスの哲学によきかをりあるかな

(『九鬼周造全集』別巻、一三六-三七頁)

九鬼周造が古代ギリシア哲学に生涯憧憬の念をもち続けた哲学者であったという事実は、その方面の専門家たちの間でも案外見落とされている。引いた歌は、九鬼が「ギリシア哲学礼讃」と題して詠んだいくつかの歌のなかの二首である。プラトンは、『饗宴』のなかで哲学を「エロス」と呼び、それは「美のアイデア」を求める欲求であると言った。美の愛求者であったという意味では、九鬼もプラトンの末裔である。ただし、九鬼はプラトンのようにこの現世を超えた彼方ではなく、夢のように果敢なく移ろいゆき、愛憎、善悪相交わる現世のものの直中に美を求めようとしていた。九鬼の詩集『巴里心景』はもちろんのこと、韻の共鳴によって奏でられる詩の音楽的美を論じた『日本詩の押韻』、また藝者の「逸楽と気品の調和した統一」の美に論及した『「いき」の構造』、さらに偶々在るものの果敢なさ(Fragilität: fragilité)に宿る美に目を留める『偶然性の問題』、そして去来する時間の果敢ない現在という瞬間に美を垣間みる「時間論」など、すべては結局そのような美の探求の成果だったと言うこともできる。<sup>3</sup>

ところで、二人の具体的な接点としては、九鬼の側からしか確認できない。神戸市東灘区の甲南大学にある「九鬼周造文庫」には和洋書を中心に七三〇〇

3 別巻、「月報 12」に所載の〈資料〉「田辺元・九鬼周造往復書簡」は、九鬼の博士論文「偶然性」(一九三二年)をめぐって、その審査に当たった田辺とのあいだに交わされた書簡である。そのなかで、九鬼は次のように書いている。「私は大兄のおっしゃるように『刹那々々を生を充実に由って生かす Ästhetizismus [唯美主義] の立場』を偶然論の中に取り入れ度い願望を持って居るのは事実で御座います……」。「大兄」とは、言うまでもなく田辺のことである。「刹那々々を生を充実に由って生かす Ästhetizismus の立場」というのは、田辺が九鬼宛書簡のなかで九鬼の「偶然論」を批評したことばで、九鬼は田辺への返信でそれをそのまま引いて、まさにその立場を偶然論の中に取り入れたいというのである。

余冊の蔵書が収められている。その中に荷風の『あめりか物語』（一九一〇〔明治四三〕年七月版）と『ふらんす物語』（一九一〇年五月版、いずれも博文館）、そして『すみだ川』などをも含む『明治大正文学全集31 永井荷風』（一九二七〔昭和二〕年七月版、春陽堂）が確認されるのと、蔵書の中には含まれないが、『「いき」の構造』の中に『歓楽』から「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」ほか一文と、『江戸藝術論』（一九二〇年）からの一文が引用されているということしかない<sup>4</sup>。しかし、それらは、ちょうど九鬼が一高を卒業する多感な時期、まだ哲学者にではなく植物学者になろうとさえ思って揺れていた頃（一九〇九年／九鬼二一歳；荷風三一歳）<sup>5</sup>に出版された小説であり、かれが、鷗外の激賞をも得て「新帰朝者」として一躍文壇の寵児となり、日本の唯美主義（Ästhetizismus）を代表する作家と目されるようになっていた荷風を共感をもって読み、なんらかの影響を受けたことは想像にかたくない<sup>6</sup>。ちなみに、九鬼が学生時代に和辻哲郎（一八八九-一九六〇）や谷崎潤一郎（一八八六-一九六五）も在籍していたが、その谷崎は、一九一一年、今度は荷風の「谷崎潤一郎氏の作品」によって激賞され、彗星のように文壇デビューすることになった。ただ、九鬼の蔵書の中には谷崎の作品は『潤一郎訳 源氏物語』（巻一-二二、中央公論社、昭和十四-十五年）と『金と銀』（春陽堂、大正七年）しか確認できない。

一九三〇年に公刊された『「いき」の構造』の初案は、「「いき」の本質」と題されて二六年にパリで脱稿されていた。そこには『歓楽』からの上の引用文は見られないから、それは帰国後の『「いき」の構造』に書き加えられたことになる。九鬼が『歓楽』を読んだのは欧州遊学前か、帰国後か定かでないが、『「いき」の

4 「洗みは甘みの否定である。荷風は『歓楽』の中で、「その土地では一口に姐さんで通るかと思う年頃の洗いつくりの女」に出逢ってその女が十年前に自分と死のうと約束した小菊という芸者であったことを述べている」（第一巻、三三-三四頁）。『江戸藝術論』からは、「いき」な建築の条件として、木材に対する竹材の効果を論じる文脈において引かれる（六四-六五頁）。注19参照。

5 九鬼は、「或る夜の夢」と題された未完の随筆の中で、中学一年から三年頃までは植物学者になるつもりでいたこと、大学の文学部を卒業して間もなく理学部へ再入学し、植物学を専攻しようかと思案したこともあったと記している（第五巻、二一三-二三頁）。

6 注3参照。

構造』のなかでその一文を引いていることからして、それを読んでいたことにまちがいはない。なぜ九鬼は「いき」をテーマとして、しかも異郷のパリで書き始めたのか、その動機、理由について、ひとつの仮説にすぎないが、とくに荷風の『歓楽』との関係を考慮して考えてみたい。<sup>7</sup>

## I ドウミ・モンデーヌ

九鬼の家系を辿ると、戦国時代から安土桃山時代にかけて三重の志摩・鳥羽辺りを拠点とした九鬼水軍にまで遡る。周造の父隆一(一八五〇-一九三一)は、もと摂津三田藩の藩士星崎貞幹の次男貞次郎であったが、藩主九鬼隆義の命により丹波綾部藩家老九鬼隆周の養子に出て九鬼隆一と姓名を改め、最後の綾部藩主となった。明治維新後は福沢諭吉の門をたたき、文部少輔(文部次官)として仕官することになる。一八八五年、森有礼が初代文部大臣になり、森と覇権を争って敗れた隆一は駐米特命全権公使に転出する。かれは、米国で身籠もった妻波津子(一八五九-一九三一)<sup>8</sup>を、欧州視察からの帰国途次ワシントンに立ち寄った文部省時代の部下岡倉覚三(天心)(一八六二-一九一三)に託し、帰国させることになる。これが一大スキャンダルが始まりになるとはだれが予想したであろうか。周造は、そのスキャンダルの渦中に、東京で生を享けることになった。

波津子の出自は、一説に、京都の花柳界とされる。<sup>9</sup>後年、四九歳になった周造が、波津子と根岸で過ごした自らの幼少年時代を振り返って認めた未発表随筆「岡倉覚三氏の思出」の中に、次のような記述がある。<sup>10</sup>

7 九鬼については、主に未発表の詩や随筆、そして未公開資料などに依拠して検討する。

8 「波津子」は「初子」あるいは「波津」と表記されることもあるようだが、やはり「波津子」が正しい。埋葬されている染井墓地の墓石には「星崎波津子」と刻まれている。「九鬼」ではなく「星崎」という姓になっているのは、離婚後旧姓に戻したからである。もともと波津子の実家の姓は「杉山」であったのだが、彼女は隆一と結婚するために、隆一の実兄星崎琢磨(摂津三田藩士)の養女になっていたという。松本清張『岡倉天心 その内なる敵』(新潮社、一〇六頁、一九八四年)参照。

9 波津子が「京都の花柳界(祇園あるいは<sup>ほんとうちやう</sup>先斗町)」の出であるという話の出所は、岡倉天心の長男一雄の著書『父天心』であるが、「どこの」花柳界なのかについては、大岡信氏(『岡倉天心』朝日新聞社、一九七五年)や松本清張氏などから疑義が出されている。大岡氏は「新橋」とし、また松本氏は「京都の小間使い」の出とする。

10 第五卷、二三六-三七頁。九鬼には別に「根岸」と題された随筆がある。これは「岡倉覚三氏の思出」と内容上重複の多いものであるが、本文に引用の文章は含まれていない。

母は急にひとり京都へ行くことになった。或る夜、岡倉氏は母の膝にもたれて私を顧みながら、莊重な口調でこの児が可愛[哀]想ですといった。父は母を岡倉氏から離すために京都に住ませたのらしかった。〔中略〕その後、母は京都から帰って来てまた父と別居していた。〔中略〕或る日曜の朝早く起きて〔根岸の〕母の家の庭で一人で遊んでいると岡倉氏が家から出て門の方へ行かれるのとヒョッコリ顔を見合わせた。その時の具体的光景は私の脳裏にはっきり印象さているが、語るに忍びない。間もなく母は父から離縁され、・・・。

ところで、『歓楽』は、「根岸に囲われている人の妾」と「私」とのときめきの出会い、めくるめく歓楽、そしてその後の絶望的な倦怠を中心に、繊細な美しい世情・風景描写を交えながら描かれた自伝風の小説である。偶然の符合であろうか、「根岸」といえば、九鬼がまさにそのタイトルで別に随筆を書き、また上の随筆中にあるように、かれが幼少年時代、岡倉天心とのスキャンダルゆえに父隆一と別居中であった母波津子とそこで暮らし、後年、「語るに忍びない」と述懐し、人知れず心の奥底に秘めていた「あまりにかなしい」思い出の土地である。『歓楽』はちょうど天心と波津子との関係が世間の耳目を集めていた頃の作品であり、その中の「根岸の女」という一語は、一般の読者にとっては単なる小説の人物設定にすぎなかったとしても、周造にとっては特別の印象をもって受けとられる言葉であったにちがいない。客観的な確証はないが、むしろそう考えないほうがおかしいであろう。

父母は離婚し（一九〇〇年八月二〇日）、母は心の病をえて人知れず病院で生涯を閉じることになる（一九三一年）。九鬼にはすでに幼少年時代から、その魂が休らうべく帰る家はなかったと言わなければならない。九鬼隆一・波津子夫妻の別居後、三人の子のうち、周造と兄三郎は波津子と、そして姉光子は隆一と暮らしていたが、松本清張氏が、「幼い三人の子は、無心に父と母との

間を嬉々として往復していた」(傍点、筆者)など書いているの<sup>11</sup>には、あまりのことに啞然とするしかない。周造は遊学中のパリで次のように歌った。

六つのとしこもりの唄になきし子は三十路してなお涙にもろし  
 おやのこと思へばあまりかなしかりしばし忘るるをゆるしてたまへ  
 (別巻、一一四；一二一頁)

老いたまふ父を夢みし寝ざめより旅の枕のぬるる初秋  
 さびしさは燕<sup>つばくら</sup>の巢と蓮の実を旅にくらへど癒えがたきかな  
 縫子よりよきもの無しとひたむきに思ひあまれる宵もこそあれ  
 いつの日かふるさつを見ん逐はれつる我ならねども命はかなし  
 (以上、「巴里心景」より)

つばくらめ我身もおなじ渡り鳥巴里の空に舞ふよしもがな  
 母うえのめでたまひつる白茶いろ流行と聞くも憎からぬ<sup>12</sup>かな  
 旅にある故とな言ひそおのづから此のさびしさは内よりぞ湧く  
 (以上、「巴里小曲」より)

そのような幼少年時代を過ごした周造は、やがて「外交官になるつもりで一高の独法科へ入学した」<sup>13</sup>。これは、周造が深く考えた末に選んだ進路だったというより、駐米公使を勤めた父隆一の交友関係を幼少年時代から見ていたかれには、それが進路として何となく自然なことのよう思われたということであろう。しかしかれは、岩元禎、ケーベル、岩下壮一、天野禎祐などといった、ひたすら人生と世界の真実を見極めようと希求する師友との邂逅・交遊を通じて、哲学への思慕止みがたくなる。一方で、植物学者になろうかとも思案

11 上掲書、一一三頁。

12 「白茶」は、「母の膝にもたれて」「六つのとしこもりの唄になきし」周造が、おそらくその肌触り、匂いまでも思い出すことのできる母の愛用した着物の色である。九鬼は『「いき」の構造』のなかでそれを茶色系統の「いき」な色の第一に挙げている(第一巻、『「いき」の構造』、六一頁)。

13 第五巻、「一高時代の旧友」、一〇六・〇七頁。

していた九鬼であったが、結局は哲学の道を選んだ。その背景には、天皇制のもと、地位や名誉をえることに汲々とする政官界に関わる父隆一への反発があると見る向きもあり、たしかにそれもないことはないだろう。隆一に関しては、師福沢諭吉によって阿諛追従の徒として疎んじられたり、女癖が悪く、妻波津子に対する思いやりに欠けたことなど指摘して、批判的に見る研究もある。<sup>15</sup> 第三者から見れば波津子の不幸の原因の一端は隆一にあると言えるのかもしれない。しかしそんなことを言って何になるのだろうか。そうした研究にもそれなりの意味はあるのかもしれない。しかし少なくとも筆者はそのような研究に信をおくことはできない。そのような隆一であっても、周造にとっては父であることに変わりはない。親子関係にとって天皇制など関係のないことだ。九鬼が哲学の道を選んだのは、やはり師友との邂逅・交友の影響によるところが大きかったであろう。<sup>16</sup> 上に引いた歌に次のようなものがあったことを再確認しておきたい。

母うえのめでたまひつる白茶いろ流行と聞くも憎からぬかな  
 老いたまふ父を夢みし寝ざめより旅の枕のぬるる初秋  
 おやのこと思へばあまりかなしかりしばし忘るるをゆるしてたまへ

14 「九鬼の老生〔福沢〕に対するいたし方は、全く賤丈夫の挙動にして、前年一時彼が私の身の政略上に出たる小策とは申しながら、君子に誣ゆるに小人をもってし、学者に附するに政客の名をもってし、なほその上に、彼が文部に居る間にも、常に慶応義塾を敵視するのみか、罵詈雑言いたらざるなく、なほはなはだしきは、学問云々につき、直ちに老生の一身を攻撃して、陰に陽に人に語るなど、近くは国会開設のその当分に至るまでもしかり」(交詢社事務長岡本貞徳宛書簡)。「もちろん彼〔九鬼隆一〕も官海中の一人、藩閥はなし、学問はなし、唯交際の一芸にて今日まで立身したることなれば、心配は多き事ならん。時としては反覆表裏、人間交際の徳誼を破るの極端に達せざれば、身を完うするの難き場合もあらん」(森村組ニューヨーク支店長村井保固宛書簡、一八八四年九月十一日、『福沢諭吉全集』第十一巻、六九〇頁)。以上は、上掲書『岡倉天心 その内なる敵』一六〇-六一頁と『九鬼隆一の研究：隆一・波津子・周造』二五三頁による。

15 上掲書『九鬼隆一の研究：隆一・波津子・周造』。

16 随筆集「をりにふれて」所収「書斎漫筆」の中で九鬼は次のように書く。「私が一高在学中に岩本禎先生とこの書〔エピクテトスの『遺訓』〕とを同時に知り得たということは私の生涯にとっては決定的意味を有っていた」(第五巻、五五頁)。



三〇代後半に九鬼が作った詩に次のような一節もある<sup>17</sup>。その中にある「三人」とは、周造と天野、そしておそらく、九鬼の『文藝論』の装幀者でもある児島喜久雄である。

高等学校や大学の頃、・・・帰りの新宿通り、遊郭の前を歩いて来る三人、  
三人とも女のことなどを話題にのせた事は 唯の一度もなかったな、僕は  
あの頃が恋しい、まだまだ希望にみちていた、人生は美しかった。

東京帝国大学を卒業し、大学院を修了した周造は、次兄の未亡人であった縫子を妻とし、一九二一年(三三歳)、彼女とともに、足かけ八年に及ぶ長期ヨーロッパ遊学に旅立つことになった。ドイツ、フランスにそれぞれ二回ずつ滞在しているが、その間のかれの活動を摘記すれば次のようになる。

### 【Ⅰ期】

一九二二(大正十一)年(三四歳)から二四年秋にパリへ移るまでの第一回目滞独の時期。ハイデルベルク大学でリッケルトに就く。ただし、後半のほぼ一年間はスイスに滞在し、植物採集と標本作りで過す。

### 【Ⅱ期】

二七年四月までの、ほぼ二年半にわたる第一回目滞仏の時期。この時期に短歌「巴里心景」および「巴里小曲」、詩「巴里の窓」および「破片」他を『明星』に投稿。二六年十二月には「『いき』の本質」を脱稿。二七年三月、四月に「押韻に就いて」を『明星』に発送。これはこのときには掲載されなかった。サルトルとの出会い。

### 【Ⅲ期】

二七年四月末から二八年六月に再びパリへ移るまでの第二回目滞独の時期。フライブルク大学に在籍。フッサール、ベッカーから現象学を学ぶ。フッサール

---

17 第一巻、『巴里心景』所収「秋の一日」、一二四-二九頁。

ルの自宅でハイデッガーに会う。十一月、マールブルク大学に在籍。翌年にかけて、ハイデッガーの講義(カントの『純粹理性批判』、ライプニッツの『論理学』)およびゼミナール(シェリングの『人間の自由論』、アリストテレスの『自然学』)に出席。

#### 【Ⅳ期】

二八年六月から同年十二月帰国の途に就くまでの第二回目滞仏の時期。八月ポンティニーで講演「時間の観念と東洋における時間の反復」(La notion du temps et la reprise sur le temps en Orient) および「日本芸術における『無限』の表現」(L'expression de l'infini dans l'art japonais)を行い、これを『時間論』(*Propos sur le temps*)として刊行。秋頃、パリのベルクソン宅を再訪。

一九二四年、九鬼はドイツのハイデルベルクからパリへ移っているが、ここでは哲学の研究に勤しむというより、押韻論や詩歌の創作に取り組み、短歌「巴里心景」や「巴里小曲」、詩編「巴里の窓」を与謝野鉄幹・晶子夫妻主宰の『明星』に、匿名S.K.で発表する(一九二五年)。なぜ匿名であったかについてはもちろん審かではないが、哲学研究のために洋行していたはずの自分が詩作に熱中していたことを故郷の親しい人々に知られたくなかったからということ、また、短歌には、上に引いたような、過酷で哀しい運命に翻弄された父母を詠んだ歌もあり、実名ではかえって関係者に無用の哀しみを与えかねないとおそれたからということなどあるだろう。

他方で、かれは『「いき」の構造』の初案「「いき」の本質」を書き、さらに、上に摘記した活動記録には見えないが、これもフランス滞在中の作と思われる、フランス語で書いた未発表随筆を何編か残している。その中に〈Geisya〉(「藝者」)と題された一篇がある。

ドウミ・モンデス      ドウミ・モルト

ヨーロッパでは、遊女は半ば死せる存在である。彼女たちは世間からつま

はじきされるアウトサイダーである。日本では「藝者」が社会の中で一定の役割を果たしていることを知るとヨーロッパの人は驚く。〔中略〕彼女たちの理想は、倫理的であると同時に美的な「いき」と呼ばれているもので、逸楽と気品の調和した統一である。(第一巻、「藝者」、四五五頁)

九鬼がなぜ藝者の美意識として「いき」をテーマとし、しかもパリで書き始めたのか、その意図の一端はこの随筆から窺うことができるだろう。九鬼はヨーロッパにあって、日本文化に対する誤解を払拭しようとして、異郷の人々に向けて機会あるごとに話し、書いていたが、それは同時に、美しい日本文化を忘れつつある遠い故郷の人々に向けたものでもあったのである。別の未発表随筆で「政治や商業や陸軍や海軍のことなどは問題にしない。そのような皮相的なことは脇においておこう」<sup>18</sup>と書いていた九鬼の批判の眼差しは、西洋に対してだけではなく、日本の状況に対しても向けられていた。近代化・西洋化を急ぐあまり、美しい文化や自然を荒廃の淵に追いやって顧みない当時の日本の趨勢に批判的であったという点に関しては、九鬼も荷風と同じであったと言ってよい。<sup>19</sup>

同時にしかし、『歓楽』にかぎらず荷風の小説の主人公がほとんどの場合男性、

18 第一巻、「それは田舎者だ」、四四五頁〔原文／フランス語〕。

19 九鬼が『「いき」の構造』の中で引いていた荷風の『江戸藝術論』は、次のような文章で始まっている。「我邦現代における西洋文明の状況を窺ひ見るに、都市の改築を始めとして家屋什器庭園衣服に到るまで時代の趣味一般の趨勢に徴して、転た余をして日本文華の末路を悲しましむるものあり。余かつて仏国より帰来りし頃、たまたま芝罘廟の門前に立てる明治政庁初期の官吏某の銅像の制作を見るや、その制作者は何が故に新旧両様の美術に対してその効果上相互の不利益たるべきかかる地点を選択せしや、全くその意を了解するに苦しみたる事あり。余はまたこの数年来市区改正と称する土木工事が何ら愛惜の念もなく見附と呼馴れし旧都の古城門を取払ひなほ勢に乗じてその周囲に繁茂せる古松を濫伐するを見、日本人の歴史に対する精神の有無を疑はざるを得ざりき。泰西の都市にありては一樹の古木一字の堂舎といへども、なほ民族過去の光榮を表現すべき貴重なる宝物として尊敬せらるるは、既に幾多漫遊者の見知る処ならずや。然るにわが国において歴史の尊重は唯だ保守頑冥の徒が功利的口実の便宜となるのみにして、一般の国民に対してはかへつて学芸の進歩と知識の開発に多大の妨害をなすに過ぎず。これらは実に僅少なる一、二の例証のみ。余は甚しく憤りきまた悲しみき。然れども幸ひにしてこの悲憤と絶望とはやがて余をして日本人古来の遺伝性たる諦めの無差別観に入らしむる階梯となりぬ。見ずや、上野の老杉は黙々として語らず訴へず、独りおのれの命数を知り従容として枯死し行けり。無情の草木邊に有情の人に優るところなからずや」。九鬼はこれには全面的に共感したであらう。注4参照。

つまり作者荷風自身をモデルにしていたのに対して、『「いき」の構造』の隠れた主人公が女性であったことも上の随筆から見て取れるだろう<sup>20</sup>。しかもその「女性」とは、「世間からつまはじきされるアウトサイダー」、つまり母を隠れたモデルとする女性であった。九鬼は、「苦界」という川に「うかみもやらぬ、流れのうき（憂き・浮き）身」<sup>21</sup>を沈める「病身」<sup>わくらぼ</sup>に密かな、かぎりなく優しい愛の眼差しを向けていたのであるが、これは蜜蜂のように「甲から乙、乙から丙にと、遂には誰れ彼れの選みなく、行き当たりばったり摺違う女」<sup>23</sup>と戯れようとして飽くことがなかった荷風には見られない点であろう。荷風の読者に女性が少ないと言われるのにも、それなりの理由があろう。

## Ⅱ 根岸の女

もちろん、女性の読者から見れば、九鬼でさえ、いや九鬼のほうこそ女がまったく分かっていない、観念的に作り上げた虚構の「女」を論じているだけだという思いがあるかもしれない。九鬼には次のような未発表随筆もある<sup>24</sup>。

我国現在の家庭女性の高貴な任務の一つは家庭的の異性通路を開拓することにある。私はこの点に就いて女性の単的な覚醒を希望すると共に、此欠陥の補充を意味する異性的特殊階級の存在理由を疑おうとはしない。のみならず、私は此種の特種存在様相は家庭女性の覚醒に刺激と動機とを与え

20 「ボオドレエル自身の説明によれば、『ダンディズムは頹廢期における英雄主義の最後の光であつて、熱がなく、憂愁にみちて、傾く日のように壮美である』。また『éléganceの教説』として『一種の宗教』である。かようにダンディズムは『いき』に類似した構造をもっているには相違ない。しかしながら、『シーザーとカティリナとアルキビアデスとが顕著な典型を提供する』もので、ほとんど男性に限り適用される意味内容である。それに反して、『英雄主義』が、か弱い女性、しかも『苦界』に身を沈めている女性によってまでも呼吸されているところに『いき』の特彩がある」（第一巻、『いき』の構造、七九-八〇頁）。

21 長唄「高尾懺悔の段」の一節。

22 「『思ふ事、叶はねばこそ浮世とは、よく諦めた無理なこと』〔中略〕その裏面には『情ないは唯移り気な、どうでも男は悪性者』という煩惱の体験と、『糸より細き縁ぢやもの、つい切れ易く綻びて』という万法の運命とを蔵している。〔中略〕『いき』は『浮かみもやらぬ流れのうき身』という『苦界』にその起源をもっている」（第一巻、二〇-二二頁）。

23 『ふらんす物語』岩波文庫、七六頁。

24 第五巻、「カフェーとダンス」、一七八頁。

る意味に於いて、少なくとも現在の我国の社会状態にあつては、積極的存在理由を持ち得ると考えるのである。

足掛け八年に及ぶ欧州遊学から帰朝した直後、『『いき』の構造』刊行前年の作であるが、当時京都で「異性的特殊階級」、すなわち藝者や、とくに新しく登場した「カフェーの女給」の多くは実質上その方面の目的をもつ男を相手にするもので、風紀を乱すものとして問題になっていたようである。その問題に対する九鬼の考えが述べられている。要するに、その種の階級は社会制度として容認されなければならないというのである。藝者の「いき」という「逸楽と気品の調和した統一」の美を論じるのは、このような女性差別思想の持ち主なのである、そもそもそのような異性的特殊階級、社会制度に美を見ようとする自体、差別を隠蔽することになるのではないか、そのような制度自体を問題にしないで、そのなかで抑圧される女性の苦しみ思いを寄せるふりをしながら、その「積極的存在理由を持ち得ると考える」とはいったいどういうことなのか、などといったような批判も九鬼に対してはあるだろう。むしろ荷風のほうがよほど正直者だという読者もあるにちがいない。

「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」。惚れた女にも荷風はすぐに飽きて、「並べた枕から女の寝顔を眺めると、・・・おぞ気立つほど厭わしく、・・・油ぎった小鼻の形が不快でならぬ」。荷風はしかし、それは恋の結末の常だと知っている。悲しみは恋につきものだとは分かっている。色褪せない愛などあるはずがない。思い出の中以外には。続けて荷風は、「それに連れて、感ずるともなく深く感じて来るのは、結婚に対する不快と反抗の念である」と言い出す。結婚などというものはいわば墓場だ。「結婚とは、最初長くて三ヶ月間の感興を生命に、一生涯の歓楽を犠牲にするものだ」。実際、荷風は本郷湯島の材木商斎藤政吉の次女ヨネと結婚した(一九一二年)ものの、その生活は一年ともたなかった。<sup>25</sup>「さすれば、この一生涯は遂に孤独で果てるよりしよ

25 十四年には新橋の芸妓・八重次と結婚したが、これも翌年には破綻している。

うがないのか<sup>26</sup>」。果たして荷風はあの偏奇館で孤独のうちに死を迎えたのであった。荷風の生涯はそれなりに一貫していて、見事と言うほかない。人生がそのまま小説になっているというか、小説がそのまま人生になっているかのようだ。

九鬼には女性に恋々としたところもあったと言えるかもしれない。妻縫子には前夫一造（周造の兄）との間に男子二児（長男隆一郎、次男隆造）があったが、その子たち、とくに一四、五歳になった長男と周造との板挟みにあった縫子から周造に離婚の申し出があったときの心境を吐露した歌があり、また未公開の書簡草稿には、縫子の申し出に戸惑い、翻意を強く促したい旨の走り書きも見られる<sup>27</sup>。むしろ九鬼のほうが普通の人間なのであろう。

憎からず思へる妻に別れぶみつつけられてさすが惑へり

今日までの妻よそびとになりしかな縁<sup>えにし</sup>たち切るふみに印おす

（別巻、「短歌ノート」、一六三-六四頁）

「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」。九鬼は『「いき」の構造』の中でその一文を引く。九鬼によれば、「いき」という趣味が成り立つために

26 上掲『フランス物語』、七四-七五頁。

27 一九三一年、縫子との離婚話が起った。「こんどことはお縫の心底の本心から出たとは僕にはどうしても考えられない。理由を聞いた時にも『子供がだんだん離れて行ってしまうから』と言ったが、全く僕と子供との間の板挟みになった窮余の思い付きに過ぎないと思う。然し僕としては一方では番町ママと武一氏とからは是非離縁をとって迫られる。他方、お縫自身には僕はなお望みをつないでいたのであったが、板ばさみに成らないように僕が全部譲歩するし、すべての生活状態をお縫の気がすむように改めるから、もう一度思い直してくれないかと頼んでも、その余地はどうしてもないとお縫自身の口から言った。それで僕はどうしても致方なく、止むを得ず、申出に対して同意の内諾を与えたのであった。もちろん内諾を与えただけであるからお縫はまだ依然として僕の妻だが、法律上の手続きを取ってしまえば妻ではなくなるわけになる。・・・」（傍点、九鬼）。縫子は原敬、高橋是清、犬養毅、それぞれの内閣の大臣を務めた中橋徳五郎とゑつの娘。「武一」とは、縫子の兄で、中橋家の長兄。「ママ」とは、おそらくゑつてであろう。縫子が周造に言ったという、「子供がだんだん離れて行ってしまう」とは、長男隆一郎が縫子に「子供を取るか、周造を取るか」と迫ったことをいうらしい。縫子がヨーロッパから一人一時帰国した（一九二四年暮れから二六年二月頃まで）のも、そのような事情が関係していたのであろう。兵庫県三田市の九鬼家の菩提寺心月院にある縫子の墓石には「九鬼一造室」とあって、周造ではなく一造の妻として埋葬されている。周造はひとり京都法然院の一角に埋葬された。「すべての生活状態をお縫の気がすむように改めるから、もう一度思い直してくれないかと頼んでも・・・」とあるのは、九鬼が親しくしていた京都・祇園の「福一」の女将中西きくえとの関係清算の含みもあるのだろう。上掲書『九鬼隆一の研究：隆一・波津子・周造』参照。

は三つの契機が必要だという。「媚態」、「意気地」、「諦め」がそれである。

媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を指定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。[中略] 異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する。媚態は異性の征服を仮想的目的とし、目的の実現と共に消滅の運命をもったものである。

(『全集』第一巻、一七頁)

「媚態」とは、男と女という二元が「合同」を遂げようとする動態である。しかし二元は「合同」に到った途端に「いき」な関係を失う。この失われた関係を言おうとして九鬼は荷風から上の一文を引くのである。しかし、「高等学校や大学の頃、・・・帰りの新宿通り、遊郭の前を歩いて来る三人、三人とも女のことなどを話題にのせた事は 唯の一度もなかったな」と歌っていた九鬼は荷風とちがってここで立ち止まり、だから「情無い」結果になるのを避け「いき」な関係にとどまるためには「二元の緊張」がなければならないと続ける。その緊張をもたらし契機が「意気地」だというのである。それによって「二元的関係を持続せしむること・・・は、媚態の本領であり、従って『歓楽』の要諦である<sup>28</sup>」という。九鬼が長唄、河東節、菌八節、清元節、義太夫節、歌舞伎などから引いて江戸趣味を披瀝するのはこの「意気地」について論じるときである。意気地とは、「野暮は垣根の外がまへ、三千楼の色競べ、意気地くらべや張競べ」(長唄「対の編笠」)、「とんと落ちなば名は立たん、どこの女郎衆の下紐を結ぶの神の下心」(河東節「松の内」)といったような、異性に対する一種の反抗を示

28 第一巻、『「いき」の構造』、十七頁。

29 九鬼は、パリで書いた初案「『いき』の本質」では、「いき」という趣味が成立するためにそのどれも欠くことができない三つの徴表として挙げる「媚(嬌態)」、「意気」、「諦め」(『「いき」の構造』での表記では「媚態」、「意気地」、「諦め」)のうち「意気」と「諦め」を説明するさい、『校訂長唄集』(岡安南甫校訂)から頻りに引く。そこにその頁数まで指示しているところを見ると、それをパリに携行し手許においていたと推測される。決定稿『「いき」の構造』ではさらに「菌八節」、「河東節」、「清元節」、「義太夫節」、「歌沢節」からの引用も加えられる。



すところのありようである。意気地は媚態<sup>30</sup>を靈化すると九鬼はいう。

しかしそもそも合同にいたらないような恋は果たして恋なのか、そのような恋にどうして歓楽などありえようかと荷風は言うだろう。荷風は立ち止まることはない。九鬼のように立ち止まって「いき」の三徴表について論じ、その構造を幾何学的図形を援用して提示しようとするなどというのは、「野暮」以外のなにものでもないということになるだろう。「甲から乙、乙から丙にと、遂には誰れ彼れの選みなく、行き当たりばったり摺違う女」と戯れようとして飽くことがない。しかもその遊びようといえ、観察しながら遊ぶというか、遊びながら観察するといったふうであり、そうやって小説を書くのである。荷風がそれを読んでいた形跡はないが、たとえふれる機会があったとしても、かれには九鬼の『「いき」の構造』は読めるようなものではなかっただろう。とくに、九鬼が第二の徴表として「意気地」を論じる段になると、荷風は頁を閉じたにちがいない。他方、九鬼は九鬼で、荷風の『歓楽』を全体としてそのまま受け入れることはどうしてもできなかつただろう。

荷風は意識的に家さへ離れようとした。肩書きや地位や昇進、そのようなものに何の関心もなかった。その象徴としての官僚や軍人の世界などは軽蔑さえた。人生には何の目的もない、美を追究する作家ないし芸術家として成功するという目的以外には。荷風の『すみだ川』は、『歓楽』以上に美しい詩情溢れる風景描写を背景に、母お富<sup>つね</sup>（恆）の溺愛に反発して生きる主人公長吉（壮吉）の満たされぬ思いを綴った自伝風の小説である。それは、遠く幼い日の壮吉すなわち荷風を、「さまざまの伝説の美」をまとめて「いい知れぬ音楽の中に投込んだ」隅田川の兩岸、それが近代化の名のもとに荒廃に瀕していま「まさに消え失せんとするその面影」を、その「荒廃の美」を、視覚的に、あたかも印象派の絵画を見せてくれるかのように色彩豊かな美しい文章によって描きとめる。果敢なく移りゆくものの美をそうした手法によって描きとめるというのは、周知のように、小説家永井荷風の他の多くの作品にも共通する特徴である。荷風

30 九鬼は、『「いき」は媚態でありながらなお異性に対して一種の反抗を示す強みをもった意識である』と言う（第一巻、『「いき」の構造』、十八・十九頁）。



の魅力の過半は、鵑外にはない、そのような風景・世情描写の美しさにあるだろう。鵑外が荷風を激賞したのも、かれのなかに自分にないものを見たからにちがいない。

そして荷風は次のように書く。「いつも画学と習字にかけては全級誰も及ぶもののない長吉の性情は、鉄拳だとか柔術だとか日本魂<sup>やまとだまし</sup>だとかいうものよりも全く異った他の方面に傾いていた」。長吉が学業に精出して固い職業に就くことを願っていたにもかかわらず、三味線などの芸事に関心をもつことを「母親のお富はあまり好くは思っていない様子で」あった。「殆ど夜の目も離さぬほど自分の行いを見まもっているらしい母親の慈愛が窮屈で堪らない」と続ける。窮屈に感じるほどの愛を受けながら、母親の期待に背き続けた荷風。繰り返し母の容態の悪化を伝えられたにも拘わらず、弟や親戚との接触によって生じる煩わしさを避けるためもあって、結局葬式にも出ないという徹底ぶりであった。

すでに幼少年時代からその魂が安らうべく帰る家もなく、自らは愛に飢えながら、父母への密かな切なく哀しい愛を生涯抱き続けた九鬼と、父母から「窮屈で堪らない」と感じるほどの慈愛を受けながら、それを生涯拒み続けた荷風。果敢なく消えゆくものの美を追いき求めたふたり。しかしその表現の手法はちがってこざるをえないだろう。それは、一方は哲学者で他方は小説家であったからというのではない。九鬼は対象から距離をとり、分析によってそのような美を追究する。かれは荷風とちがって遊ぶことの只中に美を見ることはない。というより、そのようなことはかれにはできるはずもなかった。江戸文化の残照、いま「まさに消え失せんとするその面影」、とくに「藝者」についてふれるときには。本能的に距離をとって見てしまうのである。

荷風の「根岸の女」は、「ゆきずりの女」である。荷風の「女」はいつもそうだ。荷風はいつも「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」と言っていて、絶望的な倦怠感を嘆きながら、またぞろ同じことを飽きもせず繰り返す。しかし九鬼にとって「根岸の女」は「世間からつまはじきされるアウトサイダー」、つまり母波津子の面影を連想させずにおかない、苦界の女である。九鬼が、パリで書いた未発表随筆「藝者」の中で、藝者に「いき」という「逸楽と気品の調

和した統一」の美を見ようとし、「いき」の本質」を書き始め、そしてそれを受けて、帰国後『「いき」の構造』においてその美を哲学的分析によって構造的に示そうとしたのには、荷風の「根岸の女」の描像に対するアンチ・テーゼという側面があったのではなかろうか。言い換えれば、かれは、未発表随筆「藝者」の隠れたモデルであったろう母、過酷な運命に翻弄され、誰にも救われることなく人知れず病院で亡くなった波津子の救いを密かに意図していたのではなかろうか。母の救いはかれにしか、またそのような仕方ではかなしえなかったであろう。消えゆくものの果敢なくとらえがたい美を荷風と同じように視覚的にはあるが、しかし荷風の色彩豊かな絵画風とはちがって、「いき」について（「偶然性」や「風流」についても）、矛盾のように見えるかもしれないが、いわば純化ないし霊化を象徴する幾何学的図形を援用して、無彩色の透き通るような明晰判明さをもって表現するという仕方ではか。

たしかに九鬼も次のように歌っていた。

ふみだな  
書棚の認識論を手にとりていつしか積みし塵を払ひぬ  
「普遍的」「客観的」と云ふ文字も今日は皮肉に目札をする  
灰色の抽象の世に住まんには濃きに過ぎたる煩惱の色  
範疇にとらへがたかる己が身を我となげきて経つる幾とせ

（以上、第一巻、『巴里心景』、一八九-九〇頁）

第一回目の滞独中にハイデルベルクで接していた新カント派哲学の「灰色の抽象の世」は、「濃きに過ぎたる煩惱の色」に染まる九鬼にはあまりによそよそしいものであった。引用の四首は、そのような満たされぬ思いを歌ったものである。<sup>31</sup>「生の湧躍」（élan vital）を説くベルクソンの哲学に出会って、「直観の

31 未完の随筆「或る夜の夢」の中で九鬼は次のように書いている。「ハイデルベルクへ遊学していた当時夏休みをアルプス山中で暮らしたことがあった。その時は毎日を植物の採集と標本の製作とで過ごしてしまった。[中略] リッケルト教授に夏休みにはアルプス山中で何を勉強したかと聞かれた時、私はつい遊んでしまいましたと答えた」（第五巻、二一七頁）。注5参照。

哲学はうれし手にふるる hecceitas のかをりのゆえに<sup>32</sup>と喜びを表現したのはちょうどそのころのことである。帰国後、九鬼は祇園に遊び、そこでは「薄倖のひと」と呼ばれ、「新京極を藝者、舞子、おかみなどたくさんを引きつれて遊べ」したりしていたと伝えられている。「薄倖のひと」とは「浮気者」、「薄情者」という意味である。<sup>33</sup>

他方でしかし、上に見たように、九鬼は「高等学校や大学の頃、・・・帰りの新宿通り、遊郭の前を歩いて来る三人、三人とも女のことなどを話題にのせた事は 唯の一度もなかったな」と歌っていた。<sup>34</sup>かれが祇園界隈で「薄倖のひと」と呼ばれていたのも、荷風のように「女好き」で、「甲から乙、乙から丙にと、遂には誰れ彼れの選みなく、行き当たりばったり摺違う女」と遊んでいたということではなく、彼女たちに母を見るようで、つい距離をとってしまい、深入りできず、そう思われるような振る舞いにならざるをえなかったということであろう。

## 終わりに

波津子が亡くなったのは一九三一年、すなわち『「いき」の構造』が刊行された翌年である。周造が自分の母親の死に目にあえたかどうか、定かでない。母

32 別巻、「短歌習作」、一一〇頁。

33 『全集』、「月報 10」(桑原武夫)参照。

34 九鬼は次のように書く。「時の経つのは早い。いつの間にか私は日本へ帰って来て、教壇に立って白墨の粉を吸ったり、教授会の末席にしゃちこぼるようになった。これが本当の私なのか、それとも[南フランスの]藍碧の岸の冬の日を浴びながらコーヒーの匂いを嗅いだり、酒場の灯影に丁子を噛みながらコアントロウを味わったりしていた私が本当の私なのか」(第五巻、「をりにふれて」・「藍碧の岸の思ひ出」、一〇頁)。(『藍碧の岸の冬の日の匂ふミモザの蔭に何を思ひし』別巻、一四〇頁)。九鬼は、古くからある言葉で言えば、自分を一種の「中間者」のようなものとして認識している(プラトン『饗宴』における〈μεταξύ〉、プロティノスの『エネアデス』における〈μέσος〉、トマス『靈魂論』における〈medium〉、パスカル『パンセ』および三木『パスカルにおける人間の研究』の〈milieu〉、ベルリンガー『アウグスティヌスの形而上学』における〈die Mitte〉、そして西田『人間学』における「中間者」参照)。プロティノスの術語を使って言えば、野獣と天使の両面性をもついわば「両棲類」(ἀμφίβιος; *Enneades*, III2,8, 9-11 et IV8, 4, 33)のようなものである。荷風にはそもそも自らを「煩惱の身」などと思い悩み、どちらが「本当の私なのか」などといった惑いはない。荷風には「中間者」という感覚はないのである。本能のままに生き、書く。荷風は野獣だというわけではないが、九鬼は明らかに荷風ではない。むしろ現実の多くの人間と同じように、「あれか、これか」と思い悩む、不安を抱えた存在である(第三巻、「人間学とは何か」、二〇頁参照)。

がどこで、どのようにして亡くなったのかも、周造は知らなかった可能性のほ  
うが大きい。『「いき」の構造』が、周造の密かに隠された意図通り、過酷な苦  
界という川に翻弄された病葉波津子の救いの書あるいは鎮魂の書となったかど  
うか知らない。しかし、『「いき」は『浮かみもやらぬ流れのうき身』という『苦界』  
にその起源をもっている』<sup>35</sup>という一文は、なぜ九鬼が「いき」をテーマとしてパ  
リで書き始めたのか、その理由を暗示しているように思われる。

藝者の「いき」という「逸楽と気品の調和した統一」の美を論じてはみたものの、  
「遊郭」が、ときとして、いやしばしば悲痛の声さえ漏らせぬ「苦界」であるこ  
とは、周造も承知していたはずである。だれもそのような生を自ら選んだわけ  
でもなければ、選べたわけでもない。〈Geisha〉の中に記された文章は、苦界  
に生きるアウトサイダーたちについて、かれの観念的な虚構の理想像を述べた  
それというより、苦界という川に「浮かみもやらぬ、流れのうき<sup>36</sup>（浮き・憂き）  
身」を沈める彼女たちの生は救われねばならない、「影には影の幸<sup>36</sup>」がなければ  
ならないという、かれの思いがこめられたそれというべきであろう。『「いき」  
の構造』は、周造の、アウトサイダーたちへの共感を根底にもつ書、彼女たちの、  
したがって何よりも、哀しい運命を身に負った苦界の母の「救い」を、その隠さ  
れた意図としてもつ書であったことはたしかなことのように思われる。<sup>37</sup>

しかし、翻って思いみれば、ひとは自ら望んでこの世の生を選んだわけでも  
なければ、選べたわけでもない。気づいたときには例外なしに、だれもがすで  
に「浮かみもやらぬ、流れのうき身」という病身をこの「苦界」という「川」に沈  
めてしまっていたということではなからうか。現世は邂逅と別離の場、「糸よ  
り細き縁ちやもの、つい切れ易く綻びて<sup>38</sup>」という運命の場であると周造はいう。  
そもそも、この世とこの世の生にただそれだけで意味があるわけでもなければ  
理由があるわけでもない。われわれはどこからやってきて、どこにあり、どこ

35 注17参照。

36 第四巻、『日本詩の押韻』所収「負号量」、五一〇頁参照。

37 遊郭を、ひいてはこの世を「苦界」と見、その中で苦吟する遊女を、母を、ひいては一切衆生を「病葉」と見て、これに優しい愛の眼差しを向けるというのは荷風にはない点であろう。

38 清元節「重樓閣の小夜衣」の一節。

へと去ってゆくのかと問われれば、どこからともなくやってきて、どこにある  
 ともしれず、どこへともなく去ってゆくとしか答えようもない、その意味で一  
 切衆生はこの世という「異郷」を、行く雲、流れる水のように当て所もなく彷徨  
 う「漂泊者」のようなものであろう。

周造はすでにパリ時代に、「あの朝空に迷つてゐる雲 風の行方はすべて故郷<sup>39</sup>」と詩っていたが、そのような漂泊の魂はかれだけのものではなかったのではなかろうか。それは、結局、波津子、隆一、そして天心、いや一切衆生の魂でもあったと言わなければならないだろう。『「いき」の構造』以来、『偶然性の問題』(三五年)を経て、周造が生涯一貫して変わることなく注ぎつづけた愛の眼差しの対象、それは、そのような一切衆生であった。かれは、先に引いた「岡倉覚三氏の思出」の末尾に次のように記している。

やがて私の父も死に、母も死んだ。今では私は岡倉氏に対しては殆どまじり  
 り気のない尊敬の念だけを有っている。思出のすべてが美しい。明かりも  
 美しい。蔭も美しい。誰れも悪いのではない。すべてが詩のように美しい。

法然院の周造の墓石には、かれを京都に迎えた哲学者・西田幾多郎(一八七〇-  
 一九四五)の絶筆、「見はるかす山の頂梢には風も動かず鳥も鳴かずましてば  
 し汝も休はん」<sup>41</sup>が、その碑銘として刻まれている。晩年に、「訪ひ来れば法然  
 院は冬さびて僧のつくなり入相の鐘」<sup>42</sup>と詠んでいた周造の心境に、これほどびつ  
 たりの歌はないであろう。二三歳のときカトリックの洗礼を受けていた周造が、  
 それにもかかわらず、母の出自の地でもあった京都の、法然ゆかりの仏庵に眠っ  
 ていることは、かれの意に沿わないことであったとは決して思えない。<sup>43</sup>そこに、

39 Vgl. Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, S.2, Max Niemeyer, Tübingen, 1976.

40 別巻、未発表詩「さすらひ」、一七五頁参照。

41 ゲーテ「旅人の夜の歌」の西田幾多郎訳。

42 三六年以降に書き留めた歌の中の一。別巻、一四九頁参照。

43 九鬼はハイデルベルク大学入学手続き書類の「宗教」欄に(konfessionslos)と記入している。これは「無宗教」ということではなく、「無宗派」ということであろうか。(Universitäts-Archiv Heidelberg Sig. B8061/1, 1920-1925.) なお、この公文書の情報は、現在ハイデルベルク大学で研究中の鈴木来未氏から得たものである。

死してなお「影」に寄り添おうとした周造の深い愛を垣間見ることができるのではなかろうか。

【付記】

- \* 本稿は拙稿「九鬼周造 — 一切衆生への愛 —」(『図書』第六百九十号、2006年、10月号、7－11頁、岩波書店)および「美の探求者 — 九鬼周造と荷風 —」(『荷風全集』[第二次]、第二十七卷「月報27」、2011年6月、岩波書店)をもとに、それらを敷衍したものである。
- \* 本稿は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究(2)[課題番号:22320005][研究課題名:日本近代哲学の特質と意義、およびその発信の可能性をめぐって]による研究成果の一部である。

2011年9月30日

